

日本における日曜大工趣味の生成と展開

目白大学 溝尻真也

1. 目的

本研究は、1970年代の日本における日曜大工趣味の盛り上がりを事例に、男性による趣味としてのものづくりがどのような形で立ち現れ、またその姿を変えていったのかを、当時の時代背景とともに考察することを目的とするものである。

家庭内で使用するさまざまな物品を、住民が自らの手で製作したり補修・改良を施すといった行為に「日曜大工」という名称が与えられるようになったのは、戦後のことである。その後1970年代に入ると、ホームセンターの規模拡大にあわせて、行為者の数も大きく増加していった。

本研究ではこうした歴史的経緯を踏まえつつ、この時期に盛り上がりを見せた日曜大工とはいかなる行為だったのか、また、ほぼ同時期に海外で起きていた事例と比較しながら、日本のそれがどのようなつながりや断絶を孕んでいたのかについて検討する。これらを通して、家庭内領域での男性のものづくり趣味が、いかなる社会的文脈の中で立ち現れてきたものなのかを明らかにするのが、本研究の目的である。

2. 背景と方法

第二次世界大戦後のイギリスでは、戦争で傷ついた街を住民自らが立て直す運動が起こり、そのスローガンとして *Do It Yourself (DIY)* ということばが使われた。1950年代に入るとアメリカでも *DIY* の流れが広がるが、消費文化が拡大するなか、こうした行為は次第に家庭内で営む豊かな趣味としての役割を担うようになる。そしてこれら二つの流れを汲みつつ、戦後生まれの男性たちが自らの家／家庭を築きつつあった1970年代の日本で趣味として拡大したのが、日曜大工であった。

本研究は、1960年代から70年代にかけて日曜大工愛好者たちに講読されていた趣味雑誌『手づくり』を主な研究対象とする。『手づくり』は、1970年代には会員数4万5000人を超えていたといわれる趣味サークル・日本日曜大工クラブが発行していた機関誌である。この雑誌の分析を中心に、新聞記事やレジャー白書等の統計資料も用いながら、当時の日曜大工とはいかなる営みだったのか、検討を行う。

3. 結果

調査の結果、日本における日曜大工は、高度経済成長を経て慢性的な職人不足に陥っていた当時の日本の社会的背景と、アメリカの郊外型ライフスタイルに対する憧憬、さらにそこに商機を見出したホームセンター業界が交錯する場で立ち現れた趣味であったことが明らかとなった。

一方1970年代を過ぎると、日曜大工の行為率は漸減していく。それは、土地や建物に対する制約が強い日本において、アメリカ的ライフスタイルの象徴としての *DIY* を実現することは困難であり、結果として、限られたリソースの下で効率的に生活用品等を作り出す製作行為そのものに見出し「ものづくり趣味」へと、日曜大工の意味が収斂していったことを示していると考えられる。

主要参考文献

- Gelber, Steven M., 1999, *Hobbies : leisure and the culture of work in America*, New York: Columbia University Press.
- Goldstein, Carolyn M., 1998, *Do it yourself : home improvement in 20th-century America*, Washington D.C.: National Bulding Museum.